天体力学の国際シンポジウム

古　在　由　秀*

歴史の古い天文学のなかでも，天体力学はニュートン以来の伝統をもつ古い分科であり，日本にも古くから伝えられている．実際，1759年，ハレー彗星が出現した時，江戸幕府の天文方はこの彗星の位置を測定し，蘭書によって得た知識でその軌道を決めている．

明治になってからも，1879年に寺尾寿がフランスに留学し，パリーでF. テイスランのもとに天体力学を学び，帰国して東京大学の最初の日本人の天文学の教授となり，また東京天文台の初代の台長となり1919年までその職にとどまった．

東京大学の二代目の天体力学の教授は平山清次であり，月運動論で有名なE. W. ブラウンのもとで天体力学の研究にはげみ，帰国して小惑星の「族」を発見した．この「族」は最近になって再び注目をあつめ，ノーベル物理学者のH. アルフベンの太陽系起源論のなかにも，平山ファミリーの名前は随所に見え，今や「族」の記述なしには太陽系の力学的進化は語れないようになっている．三代目の天体力学教授は萩原雄祐先生であり，1961年から2期6年間，IAU（国際天文学連合）の天体力学の委員会の委員長をつとめるなど，国際的にも後進の指導につとめられている．

こういう背景のもとで，日本で天体力学の国際会議をひらいてほしいという要望が，かなり昔から世界の天体力学者の間からでていた．これをうけ，我々もその実現をはかるよう努力し，過去にも具体化しようとしたことがあるが，IAUの都合などで実現しなかった．

ところで，昨年の夏，グルノーブルでのIAU総会の最中に，天体力学の国際シンポジウムを日本でひらく話がもちだされ，1978年の5月に東京でということで，IAUの執行委員会に提案された．というのも，その直前に萩原先生の「天体力学（英文）」5巻が完成し，また先生の80歳の誕生祝いを是非東京で行ないたいという天体力学者のねがいが強く表明されたからである．

具体的には，天体暦，天体力学，小惑星・衛星・彗星の運動の3つの委員会が，天体力学—理論と応用（Dynamical Astronomy—Theory and Application）という国際シンポジウムの開催を提案したもので，提案にはこの3つの委員会の新旧の委員長と副委員長の合計9名が署名し，この9名が運営委員会を構成することが予定されている．運営委員会の委員長には，アメリカ・スミソニアン天文台のB. G. マースデン博士が予定され，我々の提案はこれらの委員会の構成をふくめて，8月のIAU執行委員会で承認されることが期待されている．

運営委員会には，日本人としては，天体暦の委員会から水路部の進士晃博士，天体力学の委員会からは筆者が入り，日本での運営委員会の責任者には筆者があたることになっている．

したがって，このシンポジウムの主催はIAUということになるのだが，この他COSPAR（宇宙空間科学研究委員会），IUTAM（国際理論応用力学連合）にも共催を要請している．国内では，水路部と東京天文台とがホストとなり，日本学術振興会には国際集会のわくでの財政援助をお願いしてあり，日本天文学会と日本学術会議（予定）が後援団体となる．特に，東京天文台ではその100周年記念事業の一環として，このシンポジウムをあつかうことになっている．

シンポジウムは1978年5月23日から26日まで，東京築地の水路部講堂でひらかれ，27日には東京郊外へのエクスカーションが予定されている．

参加者はほぼ75名ほどの予定で，国外からは50名ほどの参加が見こまれている．このシンポジウムを提案した3つの委員会の性格からみて，天体力学といっても，ここではかなり広い意味での天体力学の論文が提出されることが期待され，3体問題や太陽系の安定論といった純粋の理論的なものから，天体暦作製上の実際問題，彗星の位置予報上の問題などにいたるまでの論文について，参加者の活発な討論が展開されよう．

外国からの参加者も，大いにこのシンポジウムに期待しているし，この機会に日本のアマチュア彗星観測者に会いたがっている人もいる．また，シンポジウムの開催にあわせ，丁度2000番に達しようとしている登録小惑星に，平山，萩原といった名前をつける計画があるときいている．なお，アメリカ天文学会天体力学分科会では，すでに昨年12月に行われた分科会の会合を，萩原先生の80歳の誕生日のお祝いにささげている．

我々ホスト役としても，もちろんこのシンポジウムの成果が充分にみのるように努力しているところなのであるが，そのためにも関係機関，団体や，日本天文学会の会員の方々からも，物心両面の援助をお願いしたい．今，我々の頭をいためているのは，シンポジウムの経費の一部を募金に頼らざるをえない点である．国外からの参加者の多くは，アメリカやヨーロッパ，あるいは南ア

* 東京天文台　Y. Kozai: An IAU Symposium, Dynamical Astronomy—Theory and Application—

メリカからやってくるのだが，ヨーロッパなどでひらかれる会議とくらべて，日本にくるにはかなり余分の旅費がかかる．他方，多くの国での外国出張の旅費のわくがせばめられており，かなりの数の参加者に，旅費の補助をしなければならないと心配しており，募金の大部分はこれにあてられるであろう．東京のホテルの宿泊料の高いのも心配の種の一つである．

いずれにしても，これらの苦労に倍するよい影響が日本の天体力学の研究者にもたらされることを信じ，国際シンポジウムの準備が進められている．

学会だより

年会の運営形式について

年会講演数の増加に伴って，パラレルセッション形式による年会運営が工夫できないかという議論が持ち上って以来，理事会では，この問題が機会あるごとに慎重に審議されて来ました．去る8月20日開催の理事会でも，この問題が前理事会からの引き継ぎ事項の一つとして議題となり，活発な意見交換が行われました．

主な意見は，例えば，(イ) 1人1登壇の制限を解除し1講演最小限10分の割当時間を確保することによって，充分な情報交換を可能にするためには，パラレルセッションによる年会運営が望ましい．但し，分野の配置については，慎重な配慮が必要であろう．(ロ) 天文学の発展には，各専門分野間の相互交流は不可欠である．よく練られた講演ならば，必ずしも長い講演時間を必要としない．従って，理想的にはシングルセッションによる年会運営を続けることが望ましい，シングルセッションによる年会運営が現在限界に達しているとは思われない．

この他，年会実施上の問題（特にセメスター最中に複数の会場を確保することは極めて困難）も含めて，いろいろな側面から意見交換が行われましたが，理事会として統一判断に到達することが出来ませんでした．

そこで差し当り，来春の年会は，1講演あたり7分間の割当時間を確保するという条件で，従来通りシングルセッションを採用することに決定しました．但し，講演数が多くてこの条件を満すことが困難な場合には，会期が4日半ないしは5日間に引き伸ばされることも止むを得ないと判断しました．

以上，表記の件について，8月20日の理事会での審議経過をかいつまんで御報告致しましたが，この問題の検討は引き続き行われる予定です．会員各位におかれましては，建設的な御意見を各支部理事に寄せられるようお願いします．特に，上記形式による来春の年会運営に当っては，会員各位の御理解と御協力を願って止みません．

（庶務理事）

野尻抱影
星アラベスク
星を愛し、星の魅力を語りつづけた著者が、とっておきのエピソードとともに綴る星空の歳時記。950円

藤井旭
星の旅
望遠鏡とカメラを肩に、星空を見上げて歩いた世界の旅。異国の空に出会った星と人との語らい。980円

新版
天文学への招待
村山定男 藤井旭 著
¥980

星座への招待
村山定男 藤井旭 著
¥980

'78 星日記
10月末刊

'78 アストロ・カレンダー
10月末刊

〒162 東京都新宿区住吉町95 振替・0-10802 電話(03)355-5311代 河出書房新社